

## モンゴル語仏典の諸相

講師 阿部 真也

現存する大蔵経としては、パリー語、漢語、チベット語、モンゴル語、満州語のものがある。その他、散逸するなどして現存はしないが、西夏語、ウイグル語などの大蔵経もあった。これらのうち、よく使われるのは漢訳の大蔵経、チベット語の大蔵経、また、パリー語の大蔵経であろう。

しかし、モンゴル語と満州語の大蔵経は、ほとんど見られることはない。本稿は、モンゴル語の仏典について、モンゴル仏教の歴史と併せて論じるものである。

チンギス・ハーン(1167～1227)と仏教との関係は不明である。チベットの高僧クンガ・ニンポ(1092～1136)と会ったという資料(蒙古源流、モンゴル佛教史)もあるが、両者の時代が食い違い、史実とは言えない。

モンゴルへの仏教公伝は、一二四七年である。第二代オゴデイ・ハーンの次男すなわちチンギス・ハーンの孫となるゴデンが、涼州(蘭州)でサキヤ・パンディタ(クンガ・ギエンツェン1182～1251)と会談したのが最初であるとされている。これは、モンゴル宮廷とサキヤ派が結びついた最初である。そして、本格的に仏教を導入したのは、元朝の創始者であるフビライ・ハーン(1260～94在位)である。

一二五三年、フビライは、サキヤ・パンディタに同行し

ていた、その甥パクパ(1235～80)を招いた。パクパは、いわゆるパクパ文字を作成するなど、モンゴルの文化に大きな足跡を残している。

元朝においては經典のモンゴル語訳も行われている。有名な翻訳者としては、チヨイジ・オドセルやシェーラブ・センゲなどがいる。この時代のモンゴル語訳仏典は水準は高く、大蔵経成立の基礎となっている。ただし、この時期の仏教は宮廷の貴族たちのものであって、一般民衆のためではなかったようである。

北元の時代は、モンゴル仏教史において、多くの仏典が翻訳されたことでも重要である。翻訳をした訳経僧の中でも、多数の翻訳を行った高僧シレート・グーシが知られる。その翻訳になるものとしては、『金剛般若経』、『一万頌般若経』、『十万頌般若経』、『法華経』などがあり、また『ミラレバ伝』などの文学的典籍もある。

モンゴル最後のハーン、リグデン・ハーンは仏教を熱心に保護し、モンゴル仏典を集大成してガンジョールをまとめることを計画した。クンガ・オエセル中心とする編纂委員会が組織され、一年くらいで完成したと伝えられるが、今日に伝わってなく、その実態は明らかではない。

今日に伝わるモンゴル語版ガンジョールとタンジョールは清朝に開板された。その内容は、最初期の翻訳を踏襲したものである。

仏典のモンゴル語訳歴史の最初期に登場する人物として、

チョイジ・オドセルがいる。その出自がチベットであるかウイグルであるかは議論が分かれているところであるが、中村健太郎氏によれば、チベット人の可能性が高いとされる。一般的に、モンゴル仏教はチベット仏教の流れの一つとして受け止められている。しかし、中村氏など、最近の研究者によって、ウイグル仏教から大きな影響を受けていることが明らかになってきている。ただし、その研究は、主として言語学の視点からのものである。

モンゴル仏教はチベット仏教のコピーと言われることがあるが、決してそれだけではない。確かに、チベット仏教の影響は大きく、経典もチベット語経典に忠実であるが、ウイグル仏教からの影響も大きくある。特に、仏教語彙はウイグル語に由来するものも多くある。これは、特に言語学的な研究による成果である。これからの課題として、思想的独自性を考察することが重要である。そのためには、ダンジョールの研究、そして、モンゴル人の著作になる仏教文献の研究が必要である。